In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	文学史研究と文献学の立場
Author	阪倉, 篤義
Citation	文学史研究. 6 巻, p.22-25.
Issue Date	1957-04
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	文学史研究会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

文学史研究と文献学の立場

阪倉篤義

○

文学における「ことば」が、このごろ特に、いろいろと論じられるようになった。もちろんそれは、いわゆる訓詁註釈のためではなくて、いわば、それぞれの作品における文学そのものを、「ことば」の面において究明しようとする動きである。「文体」という語は、現在なお人によってまちまちな意味に用いられているけれども、とにかく、これが、従来は単に外的な文の様式というほどの意味に用いられて、純語学的な問題のように見なされていたに対して、近頃はむしろ、国文学の畑の人達が、もっと内的な意味において、これを取上げようとしている。これまで、（殊に近代文学を論ずるに当って）、各作品の具体的な表現の形式をはなれて、その思想性や芸術性をあげつらうことを以て足れりとしていたことに対する反省の結果であって、われわれの文学史研究もまた、当然このような線に沿うて、今後の考察を進めていかなければならないだろう。そのために先ず必要なのは、正しい本文批評を経たテキストの存在である。そういう文献学的な成果を待たないでは、新しい文学史研究を進めていくことは、やはり不可能であると言ってよい。

このことは、余りにも当然であって、いまさらことごとしく述べたてるまでもないことであろう。しかし、ともすればわれわれの文学史研究が、いわゆる文献学的研究に反撥し、対立するもののごとくに見なされ勝ちであることに対しては、十分の警戒を払わなければならないと思う。むろん、過去の文学史が、例えば一つの作品の成立年代に関して、いわば考証のための考証の筆を費やしていたこと、そしてただそれだけに止っていたことに対しては、われわれは当然、批判的な態度をとる。しかし、右に言うような立場からする文学史研究においても、作品成立の時の姿を明にし、その年代を決定する作業はやはり欠くことのできない重要性をになうものであろう。問題は、その際、これまでのいわゆる文献学の方法や成果に、どこまで順応し、どこから批判的であろうとするか、ということである。

亡くなった池田亀鑑博士は、文献学というものが、国文学の全領域において占めるべき地位について、十分の抱負を持っていられたようであるが、常識的に使われている「文献学」または「文献学的」という術語に対して、その正しい意味を説こうと試みた「文献学的立場の領域と限界」という論文（国語と国文学　昭和二十六年四月号）において、つぎのように述べられた。

わたくしとしては、与へられたる言語・文献における原本的性格の確認と諸法則の探求といふことを、文献学の使命と考へたい。もちろん、この「原本的」といふ表現は、かなり複雑な内容をもつものである。ここでは、単なる書籍の原始形態、すなはち作者の自筆本といふやうな形式的な方面だけを意味してゐるのではない。むしろ、その言語または文献に参与した最初の主体において認識されたものの的確な復原といふことを意味してゐる。

また、同じような意味のことを、

文献学においていふところの原本的性格なるものは、単に原作者の自筆本といふやうな、外面的な、そして物質的なひびきのある語の表象するやうなものでなく、もっと内面的な意味をふくめたものである。すなはち、原作者によって経験された作品形象の終極的な発展形態、さらにいへば持続発展する作品形成の最も根源的な一点といふ、精神性をふくめての自筆本なのである。くりかへしていへば、原作者によって認識されたものそのものなのである。

とも述べられている。この立言は、その限りにおいて全く問題がない。このような、「原本的性格」というものは、われわれの文学史研究に当っても、常にまず求められるところのものであった。われわれは、こういう「文献学」に対して、何ら反撥すべき理由を持たないのである。

しかるに池田博士は、文学史というものの成立の可能性に対しては、否定的な見解を表明された。それは、博士においては、文献学的国文学が、個体としての作品の原本性の追求を終局の目標とするものであったからである。個を越えて、他との関係としての価値評価はこれをなしえないし、また、しようとしてはならない、とするものであったからである。一般に文献学においては、普遍的な原理の探求よりは、まず個体の正しい認識を目指すのであり、そのような個体を、個々に批判し、解釈することを直接の目標とするのは事実であろう。そしてまた、「文芸学的研究にせよ、歴史学的研究にせよ、作品における個の確実な認識をもたないで、いかなる方向にも、それぞれの学問活動を正当に展開することは不可能である」(同論文52頁)とすることもまた、たしかに正しい。そのような自覚に立って、文献学を、ある場合には、文芸学や文学史学のための基礎的研究の段階にあるものと認めておくのならば問題はない。しかし実際には、博士に限らず一般に文献学的立場に立つ人々は、自らの立場から、全国文学の領域にわたる方法論をも律しようとする。「文学史は果して可能か」というような疑問の提出の仕方は、まさにその一つの表われに外ならない。その人々には、とにかく、個を超えた一般的規範的な原理、形式化された方法論的敍述というものに対する不信の気持が、抜きがたいものとなっているようである。

「もちろん文献学者といへども、作品の価値規定を行はないといふわけではない。ただその場合は、彼が文献学的といふ限界を超えて、他の領域内に身をおき——そのことは避け難いことであるが——そこでものをいってゐるといふことを強く意識すべきである」と、博士は言われる。しかし果してそのような截然たる区別が、実際に可能であり、また必要であるだろうか。文献学において最も重要なのは即物性ということであり、「現にそこにあるものをして語らしめる」ということであるとされる。しかしながら、右に言われるような原本性の追求という、最も文献学的な目標の達成そのもの

のために、実は価値判断がそもそも不可避的に必要とされる面があるのはしまいか。

○

例えば、伝存する平安時代の物語について、その原本性を追求する上には、かずかずの問題があろうと思われる。「海人刈藻」のような作品について言うと、現存のものは、明月記（貞永二年三月二十日の条）・色葉集巻三・風葉集・無名草子などにその名の見えている旧本「あまのかるも」とは別のものと考えられている。それは主として、風葉集に収められた五首の歌が、現存本における百十八首の中には見当らないという理由によるのである。ところが無名草子に見える「あまのかるも」の評言より推せば、旧本と現存本との間には、全体の筋書においては殆ど異るところがないようだ。すなわち、現存本は、旧本をかなり忠実に承けているものとしなければならない。しかもなお両者は、それぞれ旧本と現存本として、区別して扱われているのである。

竹取物語の成立なども、ややこれに類するものがあるであろう。現存の諸本と、例の源氏物語に見える竹取翁の物語とは、その筋書において、大体同じような姿をもつもののごとくである。しかし、あのような簡単な抜き書きだけで、こうした推定を下すことは、かなりに危険だと言わなければならない。源氏が風葉集の役目を果さなかったから何とも言えないけれども、ここにもやはり、右と同じような旧本と現存本という関係を想定すべき可能性も多分にあると言える。そしてすくなくとも、現存の、古本・流布本二系統の祖本はおそらく中世の書写本であって、「物語の祖」といわれた頃の姿からは、すでに、かなり中世物語風にくずれたものであったことをも考慮しておいてよいのである。しかもまた、一方では、はやくから言われているように、竹取物語として成立する前に、漢字で記された竹取翁伝説というべきものが存した可能性も考えられる。そのような形で、いわゆる竹取説話は、すでに創作された小説としての形象化の段階に入っていたことも想像されるのである。

この場合、竹取物語の成立というものを、果してどのように考えるべきであろうか。これらを、それぞれ第一次・第二次・第三次の竹取物語として別個に扱うことも一つの方法であろう。個の立場を尊重すれば、あるいはそれが一番安全な方法であるかもしれない。しかしそれは、一面において悪しき瑣末主義におちいる危険をはらんでいる。たしかにそれらは各々表現の形式を異にしているであろう。しかし文学における「ことば」を重視するということは、そういう違いに無闇な重大性を持たせるということではない。もしこの立場を極端に推しすすめれば、やがては各写本ごとに、それぞれ別個の作品の成立を考えなければならないことにもなるだろう。しかし必要なのは、むしろ、そうした異同がそれぞれ作品の本質にとって、どのような重大さを持つかを考量して、それらを一つの作品の異本として括り得るための判断である。例えば三宝絵詞には周知のごとく、関戸本（東大寺切）・観智院本・前田家本という、全く文様式を異にする三種の伝本が存する。現在一般には、山田孝雄博士などに従って、永観二年にこの作品が成立した時の原本的な姿を存するものは、平かな文体の関戸本（東大寺切）であって、他の二書は後世の書き改めであろうとされている。しかるに、この場合、前田本のごときは、漢字のみによる全く異った表現の模式を以て、後に書改められたものと考えられるけれども、やはり一つの異本として

扱うことが可能である。そして、かえって、かの観山要記に見える草稿本――それは恐らく漢文書きであったろうが――は、今言う三宝絵詞にとっては、むしろ旧本的な立場にあると見ることができよう。

竹取物語についても、右に言う第一次のもの（漢文体のもの）は別にして、二次三次をとりまとめるか、或いは、一次・二次・三次をすべてとりまとめるか、とにかくそれらを一つにくくって、そこに竹取物語という作品の原本的性格を追求することの可能性を先ず考えてみるべきであろう。成立年代の問題もまた、そこではじめて論じうるはずである。そして、その原本的性格なるものが、言われるごとく「原作者によって経験された作品形象の終極的な発展形態、さらにいへば、持続発展する作品形成の最も根源的な一点といふ、精神性をふくめての自筆本である」とするならば、そこに当然要求されて来るのは、価値判断ではないか。そのような価値判断を下すことは、決して他の領域内に身をおいてのことではなくて、原本性追求という文献学の操作そのものが、そもそも要請するものではないのか。と言うよりは、文献学の目標を、池田博士の言われるごとき高度のところにおく限り、もはや、あえて、文芸学的だの文学史的だのという立場の区別を行うことがおかしいのである。文献学がまず純客観的な立場から作品における個の確実な認識を完成し、さてその上に立って文芸学が、あるいは文学史学が、それぞれの面からの研究を進めて行くというような考え方は、あまりにも形式的であると言わなければならないであろう。

「文学史研究」第五号　正誤

頁	段	行	正	誤
3	下	19	おしとこそおもへ	おしとこをおもへ
4	上	第一表	宇津保俊蔭	宇津保後蔭
6	上	第二表源氏物語の行(B)(ぬ)の段	14	18
7	下	18	雪そ	雲そ
8	下	3、6、12、18	(B)	(B)
8	下	11	消えなましかば	消えましかば
9	上	1、6	(B)	(B)
9	上	23	探	採
12	下	14	数首	類首
13	下	22	位置にある	位置ある
14	上	3	葉原	蓬原
15	上	7	吉野	吉野
16	上	25	姿勢と	姿勢を
16	下	6	軌	期
16	下	19	対蹠的	対称的
19	下	9	ためには、	ために、は
23	下	2	したり百人一	したり、また百人一
23	下	3	宣明する	宣明とする
24	上	9	認識としての文学史	認識として文学史